



高い影、低い影。

二つの人影が昏々と眠り続ける殉の傍らに立っていた。

「おにいちゃん、なにもいってくれない…」

佐野碧は無菌テントの向こうをじっと眺めながら呟いた。

「なにも聞こえないのか？」

堀川烈が碧に訊ねた。

「時々、寝言みたいな『声』が聞こえるけど、それだけだよ。ウチがどんだけ話しかけてもダメ」

「そうか…」

「おじさん、おにいちゃんのおにいちゃんなんだよね？」

「ああ」

「もし、もしもだよ、殉にいちゃんが…しんじったら…おじさん、どうする？」

つぶらな瞳をいっぱい広げて、碧は堀川を見上げた。

「悲しむだろうな。辛くなるだろう。そしてこの国を出る。もう戻る事もないだろう」

「泣かないの？」

「たぶん」

「どうして？ おじさんの弟なのに」

「もう流す涙がない」

「なんで？」

ポケットに突っ込んでいた片手を抜き、堀川は軽く碧の頭を叩いた。

「大人になっても泣けるのは強いひとだ。弱い奴は泣き過ぎて、大人になる頃には涙が枯れちまう」

「おじさんは、じゃあ弱いひとなの？」

「そうらしい。こうはなるなよ、お嬢ちゃん」

慌ただしい足音に堀川が顔を向けると、白衣の男が足早に近付いてきた。

「堀川さん」

「オマエか…」

九十九は素早く目礼すると、堀川の脇を抜け病室の奥へと入っていった。

いいんですよ、逃げて

刑事には何も言ってませんから

擦れ違いざまに九十九が堀川へ耳打ちした。

彼は何も返さなかった。

「…あれ？」

不意に碧が眉をひそめた。

「どうした」

「いま…なにか…聞こえた」

「殉がなにかいったのか？」

「…なんだろ…なまえ…おねえちゃんの名前？」

「清水加夏子と呼んでるのか？」

「ちがう…誰？」

碧が耳を覆いながら首を傾げた。

◇

幾台かのモニターに囲まれたデスク。
若い医師が情けない顔をしてそれらを睨んでいた。

「九十九…」

部屋に入ってきた九十九にすぎるような声をかける。

「泣き言は後だ。状況は？」

「芳しくない。肝機能はいい数値じゃないが今のところは落ち着いている。肺炎も抗生物質で抑えていたんだが突然、意識を失った」

「…脳、か。MRIは？」

「俺も同じことを考えた。今、技師がこっちへ向かっている」

「抗凝固剤は」

「減らしていた。あれだけ弱っている患者には投与にもバランスが必要だからな」

「血栓だとしたら…」

「卒中と同じだ。回復は難しいだろう」

「とにかく、今は出来るだけの事をやろう」

看護師が来て、MRIの準備が出来たと告げてきた。
九十九は若い医師の背中をぽんと叩くと一緒に部屋を出た。

◇

夜が来て、夜が更けた。

紗季子はそっと加夏子の肩に毛布を掛けた。
病院からの電話を待ちながらテーブルに伏して眠ってしまった娘の頭をそっと撫でながら、目の前で胡座をかいている大男二人を眺めた。

ソファを潰してしまうだろうヨシオの巨体を床に座らせ自分も腰を降ろした恒彦は、ぽつりぽつりと喋る彼の身の上話
に耳を傾けていた。

ヨシオは難しいことは話せない。
聞かれれば素直に、だが幼い言葉で答える。
その一つ一つを拾うように恒彦が話しかけていた。

そんな彼の目が腫れているのに紗季子は気がついた。

「あなた…」

「…なんて親なんだ。こんないい子に悪事の片棒担がせて、気に喰わなきゃ銚子を打ち込んで…」

「とうちゃん、わるいことしてた。でもボクにごはんいっぱい食べさせてくれた。おこるとひどいことした。でもかあちゃんがいきってた頃のとうちゃん、やさしかった」

「そうか…そうか…」

盛大に鼻をすすり上げた恒彦が、両手で顔をごしごしと擦った。

「どうだ、そろそろお腹がすいたんじゃないか」

「うんっ！」

「よしっ、ご飯にしようじゃないか！ おじさんちはな、おじさんもいっぱい食べるからご飯はうんとあるんだ。好きなだけ食べてっていいぞ」

「ほんとっ!？」

「ああ、料理も美味しいぞ」

目をキラキラさせてこっちを見たヨシオにニッコリと微笑み、立ち上がった紗季子は台所へと向かった。

◇

一週間が過ぎても、殉の容態は変わらなかった。

医師達は意識の回復に期待しつつ肝臓移植の準備を進めていた。

誰もが諦めを隠せなかった。

ただ一人を除いて。

「使いたくない手だが、今のところ他に方法がないんだ。協力してくれるね」

見舞いの帰りに呼び止められた加夏子は、いつになく厳しい表情の九十九に告げられた。

「ワタシに出来る事なら何でもします。でも長官、何をするの？」

「外科的なアプローチは限界だ。残るは僕の専門分野だけだ」

「それって、もしかして」

「彼に『内側』から刺激を与え脳を活性化する。碧ちゃんの助けも借りて君と殉君をもう一度シンクロさせるんだ」

「そんな事が出来るんですか？」

「君達は今までに二度、シンクロに成功している。いわば頭の中に『通路』が出来ている状態なんだ。きっかけさえあれば難しくはない筈さ。脳の器質的欠陥や損傷をサイコインにより克服することは可能だ。乃木修司がいい例さ」

「でもあのヒトは」

「未だに狂ったままだ。リスクは極めて大きい。だがこのままでは、殉君は良くて植物人間、悪ければ生命維持の能力すら失ってしまう」

「わかりました。やります」

「ありがとう。バックアップの準備が整うまで半日かかる。実行は明日。いいね」

「はい」

「たぶん、これがラストチャンスになる。頼んだよ」

病院を出た加夏子は、取り出した携帯電話のボタンを押した。

「ママ。わたし」

「カナちゃん、どうだったの今日は？」

「うん。まだダメ。それでね」

今しがた九十九と話した内容を紗季子に話す。

そして、もうひとつのことも。

少しの間黙っていた紗季子の声が、やがてゆっくりと聞こえてきた。

「わかったわ。何かあったらワタシとパパで必ず何とかするから」

「ありがとう、ママ」

「今更なにいつてるのよ、へんなコね」

「尾道で悪い奴らにさらわれて、ヨシオがワタシを助けてくれたとき言ったの、『かぁちゃんが二人いるってスゴイ！』って。優子ママが死んじゃった時はもの凄く悲しかったけど、今はホントに感謝してる」

「…いいから。帰ってらっしゃい」

加夏子は携帯を切ると、一度病院のほうを振り返った。

